

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1583

私たちの心身の垢を洗い去って、
てくれるものは、如来八解の池、
三昧の水だけであろう。

（『雜譬喻經』）

△解説▽父親が川の功德によつて神通（特殊能力）が得られると信じて水浴していたと聞いた息子が述べた言葉。如来八解とは、煩惱を捨て、心身が束縛から離れる八つの禅定のこと。心身の垢を除くには、沐浴ではなく、心を落ち着け、正しい実践によつて智慧を身につけること以外にないと述べる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 19 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1582

「教えには次の功德がある」
甘・冷・軟・軽・清浄・不臭・
飲時不損喉・飲已不傷腹。

（『俱舍論』）

△解説▽教えは、味わい深く、煩惱の熱を冷まし、柔軟に心の中に入つていき、心が軽やかになり勇気がわく。清浄であり、臭みやアク（不純な要素）がなく、聞くときには自らを害することなく理解でき、聞いた後も生きる栄養になる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 18 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1585

相手を愛するためには、その人の求めるものをよく理解して、自分の思いを押しつけないことです。理解は愛の基本です。

（ティク・ナット・ハン）

△解説▽「相手のため」が時には、自我のフィルターを通して曲がった愛になっていないだろうか。「自分の」幸せという固定観念を手放す必要がある場合もある。そのときにその愛は慈しみの心になるのだろうか。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 21 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1584

朝には多くの人々を見かけますが、夕べにはある人々のすがたが見られない。夕べには多くの人々を見かけるが、明日にはある人々のすがたが見られない。

（釈迦）

△解説▽無常なる世を詠嘆的に感じたり、厭うことを教えるのではないだろう。無常である以上、別れは必ず起こる。それはいかんともしがたい。そこを見据えて、執着なく、自らを失わずに無常を生きるかが重要。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 20 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1587

尊き師はすべてを知り、すべてを見るものであるが、弟子らに、不適當なときに学ぶべきこととがらを制定しない。時期が来たときに、生涯犯すべからざる学ぶべきことがらを制定するのである。（『ミンダ王の間』）

△解説▽機が熟したときに、学ぶべき必要な事柄をアドバイスするのである。知っているからとて、時期を考えず多くを教える効果は期待できない。教え導くものにとつての心得。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.23 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1586

お前を悩ます多くの余計なもの、すべてお前の判断の中にあるので、お前はそれを除去できる。（マルクス・アウレリウス）

△解説▽判断は情報を得て認識にもとづいて下すもの。しかし、その過程において自分の都合や偏見が入り込んでいたら真実にそぐわない判断になり、悩みや苦しみを生む。だからこそ、その過程を見極めていくことで、対応することも可能となるだろう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.22 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1589

外的なことによつて清浄になれると考える人は、じつはそれによつては清らかになることができない、と真理に熟達した人々は語る。（釈迦）

△解説▽清浄である境地を得ようとして、自らを見つめることなく、善い悪いの原因を外的なものだけに求めたりする人、また、その前提で実践する人は、清らかな状態には達し得ない。なぜなら真実にそぐわないことをしているから。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.25 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1588

川のなかでも、人が足場を持たないあいだは、全身が流されてしまう。足場を得て陸にたつたならば、かれはもはや流されることなく、彼岸に達した者となる。（釈迦）

△解説▽自ら学び実践するひとにとつても、拠るべき足場は必要である。それは、ときには教えであり、よき師匠、よき友であつたりもする。この足場を得たならば大切にしたい。何よりの救いであるから。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.24 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1591

これら六つが「仲間を分裂させる」論争の根源である。六つとは何であるか。（釈迦）

△解説▽弟子たちの集まりを乱す例を六つあげる。怒りを抱いている。他人の徳を隠し自分の劣っている徳を偽る。嫉妬深く物惜しみする。自分がない徳を偽装して自分の悪を隠す。邪悪な欲望をもつ。自分の見解に固守して離れない。このような論争の根源を絶つように努力すべきであるという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 27 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1590

修行の彼岸へいたるべしともうことなかれ。彼岸に修行あるがゆえに、修行すれば彼岸となり。（道元）

△解説▽苦しみの世界を此岸と、克服した境地を彼岸という。つまり、彼岸は悟りの岸である。しかし、ここでは、実践修行しているそのすがたが彼岸に至っている境地なのだという。別世界としての彼岸を求めるときではない。彼岸であるゆえに修行ができているともいえる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 26 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1593

みずからは清き者となり、互いに思いやりをもって、清らかな人々と共に住むようにせよ。そこで、聡明な者どもが、ともに仲よくして、苦惱を終滅せしめるであらう。（釈迦）

△解説▽清らかな仲間、苦悩を乗り越えようと目的を同じくする人の集まりにおいて、仲間同士が互いに敬意をもって振る舞うことは何より重要だろう。各人が互いの助けとよりどころとなるにちがいない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 29 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1592

これら六つの教えは記憶すべきことで、愛すべきで、調和を生み、和合に導くことである。六つとは何であるか。（釈迦）

△解説▽その六つは次の通り。慈愛ある身体の行為。慈愛ある言葉の行為。慈愛ある心の行為。得た物を仲間とともに使用する。正しい戒律により清らかな行いをする人と共に住む。苦しみの消滅へ導く教えを実践する仲間と一緒にいる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2020. 4. 28 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1594

迷妄にとらわれて自己を害な
っている人が、もしも泣き悲し
んでなんらかの利を得ることが
あるならば、賢者もそうするが
よからう。泣き悲しんでも、心
の安らぎは得られない。

(釈迦)

△解説▽厳しい言葉だが、真実で
ある。自分を責めて、嘆き悲しむこ
とだけでは問題は解決しない。ます
ます苦しみが大きくなる。身体をこ
わすことにもなる。落ち着いて、真
実をみて、なすべきことを考えたい。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2020.4.30 中村元記念館協力